

神戸市 介護機器ニーズ発表会 個別ケアへ 評価システムなど望む

神戸市は11月25日、介護事業者の現場ニーズを

介護機器・ロボット開発メーカーへ伝える発表会を開催した。同市の「医療産業都市」事業の一環で、機器開発と介護現場ニーズのミスマッチをな



シーナ
糟谷有彦社長

くし、ニーズに即した機器開発を支援するのがねらい。開発メーカー関係者が集まる中、3事業者が現場からのニーズを発表した。

発表の前に特別講話として、村田アソシエイツの村田裕之代表が登壇。高齢者を「知的に成熟する人生の発展期」と捉え、

社会福祉法人弘陵福祉会
溝田弘美理事長



トの開発でも重要だと説明した。

最適な転倒防止策は

続いて、3つの介護事業者が順に発表を行った。兵庫県内で在宅介護事業などを展開するシーナの糟谷有彦社長は、サ高住と介護付有老ホームの居室での転倒事故の現状と予防策について発表。今年10月までの1年間で、サ高住ではトイレへの移動時、有老では居室内歩行時の転倒が最も多く、ほとんどの人で認知症の症状があった。転倒防止策として、居室やトイレに手すりを設置したり、有老では「眠りスキャン」を導入した。「居室での転倒は、いつなぜ転倒したかが見えづらい。ベッドから立ち上がったタイミングで反応するマットセンサーは、警報を聞いてから職員が駆けつけなくても間に合わないケースもある」と話した。

より前向きな生き方の実現を支援する考え方が、福祉が、福祉機器や介護ロボット

る社会福祉法人弘陵福祉会(溝田弘美理事長)は、早くからリフトや機械浴、セラピーロボットを施設に導入、人型ロボット「ペッパー」もレクリエーションなどで活躍している。オーストラリア式のノーリフトケアを推進し、抱えあげない介護の実践にも力を入れている。

溝田氏は、慢性的な介護人材不足の中で、特養でも利用者の重度化を防ぐ必要性を強調。利用者が自由に歩行しても安全なよう、自立支援を促進しながらも転倒予防につながる仕組みをニーズに挙げた。そのために、利用者の筋力を補うアシストスーツ、利用者が一人で歩行器を使っても転倒を防ぐシステムなどの開発を望んだ。

最適な支援導き出すシステムを

最後に、神戸市内で介護付有老ホームを運営する、J R西日本プロパティーズの中尾美隆氏が登壇。同ホームでは、入居者の個別ケアの質を高めるため、介護・リハビリロボット機器などの導入を検討している。個別対応向上のために求められるニーズとして、利用者個々の望む暮らしに照らして本人の残存機能などを分析し、客観的にその実現可能性を評価して必要な支援機器を提示したりできるシステムなどを挙げた。

一人でも安全な歩行を



神戸市で特養を運営す

J R西日本プロパティーズ
中尾美隆氏

ムなどを挙げた。